都道府県別賞一等

あきらめた未来のその先に

北海道　札幌市立北都中学校　一学年

安達　亜佑

我が家では、夕方になると自然に家族がリビングに集まる。父が帰宅し、三姉妹がそれぞれのことを終えると、いつの間にかみんな同じ部屋にいる。その中心にいるのは、産まれたばかりの弟だ。弟が笑うと父が笑い、姉も笑い、母も笑う。私もつられて笑ってしまう。私はこの時間が大好きだ。でも以前の私は、こんな日が来るとは思っていなかった。

「子宮頸ガンになっちゃったの。」と母からそう聞いた時、私は『ママが死んだらどうしよう。』と思って、頭の中が不安でいっぱいになった。それなのに、母に優しくすることはできなかった。

「今、忙しいから無理。うるさいなぁ。」心配でたまらないのに、不安な気持ちを母にぶつけるようにきつく当たっていたのだと思う。そんな自分が嫌だった。

母が入院すると、家の中の様子は大きく変わった。父は仕事、姉は部活や勉強があり、私が四歳の妹の世話をすることもあった。料理や洗濯、そして妹の世話。今まで母がしてくれたことが、こんなにも大変だったのかと初めてわかった。特に寂しかったのは食事の時間だった。いつも母が座っている席だけがぽつんと空いている。その席を見ると『ここにママがいたのに……。』と思い、私は寂しくてたまらなかった。

母の病気をきっかけに、もう一人子どもを産むことは難しいことがわかった。私は、本当は弟がほしかった。弟がいる生活に憧れていた。でも母の命には代えられない。『三姉妹でいい。仕方がない。』と自分に言い聞かせた。

母の手術や入院には費用もかかったけれど、母が加入していた生命保険がその負担を支えてくれた。お金の心配が少し軽くなったことで、家族は母の治療と回復に専念することができた。そして、母が元気を取り戻した後、思いがけない知らせがあった。母のお腹に、新しい命が宿ったのだ。

弟が生まれる日、父と私たち三姉妹は、全員病室にかけつけた。

「頑張れ。」

みんな声をかぎりに母を応援した。母は必死に頑張り、ついに弟が産まれた。母と姉は泣いていた。私も涙をこらえながら母に、「頑張ったね。」と声をかけた。もう無理かもしれないと思っていた未来が、目の前に現れたようで、言葉にならないほど嬉しかった。

弟が産まれてから母は、今まで以上に幸せそうな笑顔を見せることが増えたし、

私も弟の顔を見ると、辛いことや嫌なことが吹き飛んだ。弟が泣いていると、私は自然とそばに行きたくなる。小さな手を握ると、弟がぎゅっと握り返してくれる。その顔を見ていると嫌なことも忘れてしまう。弟が私の心を癒してくれた。私は以前より、家族に「ありがとう。」が素直に言えるようになった。

今、リビングには家族みんなが集まっている。弟のかわいい笑い顔が見たくて、自然と家族全員が集まってくる。あのとき私は、母を失うかもしれない不安に押しつぶされそうだった。一つだけぽつんと空いていた母の席。今は母がいる。弟がいる。家族全員がそろっているリビングで、家族みんなが笑っている。この幸せは、決して当たり前ではないと、私たち家族は知っている。

生命保険が支えてくれたのは費用だけではない。家族が安心して母を支え、その先の未来を思い描くための時間と心の余裕も与えてくれた。その未来の中に弟がいる。だから私は、今ある幸せを大切にしたい。そしていつか大切な人が不安なときにそばにいて、未来をあきらめずにいられるように言葉と行動で支えられるようになりたい。

弟の笑い声がリビングに広がる。私は、家族みんなで笑える今を大切にし、この幸せな時間を未来へとつないでいきたい。

私の家族は世界一幸せな家族になった。